
殺し屋ジョブスはいじめられっ子 ~ Revenge killer . Jobs ~

ジョブス・マンソン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋ジョブスはいじめられっ子 ～Revenge killer
er・Jobs～

【Nコード】

N1967Z

【作者名】

ジョブス・マンソン

【あらすじ】

やあ、いじめられっ子のみんな。

僕はジョブス・マンソン。

君たちと同じいじめられっ子だ。

だが、君たちとは決定的に違うことがある。

それは行動力さ。

僕はあのイカした奴らを皆殺しにするため、殺し屋になることを決意した。

だけど現実はずらいね。

訓練って名前の地獄は、ひよろひよろなガキにすぎない僕にとって、
いじめられることよりも辛かった。

これは、とあるいじめられっ子の復讐日記。

殺し屋になるなんて、とっても簡単だ

今時、自分の生活に疑問を持ったバカが殺し屋になるなんて日常茶飯事だ。

隣に住んでるハリーなんか、友達の首にナイフを突き刺して、色んな物をえぐり出していたらしい。

そんな彼はポリス共に捕まりもせず、今も普通に学校に登校して、平然と他の友達と談笑している。気の違ったような狂者とは思えないほどの常人っぷりだ。

つまるところ、僕も殺し屋になろうと思っている。
なぜかって？

そんなもん、決まっているだろ？

僕はくだらない日常に飽きてきたバカだからさ。

「出てこいよ、ジョブス」

同級生の、嫌みな笑い声が、僕の隠れている個室に聞こえた。その声に毎日のようにストレスを感じていて、もし僕が臆病じゃなかったら今すぐ気違いハリーのようにヤツの首にナイフを突き立てただろう。

僕は臆病だ。

「水かけてやろうぜ」

幼稚なことばかり考える奴らに、苦笑した。

もちろん、そんな風に気取ってみせても僕にはスーパーマンみたいな力はないから、ただのええかつこしいにしかならない。

バカ共は容赦なく水を降り注いだ。

そして聞こえるバカたちの耳障りな笑い声。

これが僕の日常だ。

いや、こんなの序の口というところか。

バカな奴らの中には、ラグビー部に所属する奴なんかもいたりして、その無駄に鍛えられた、岩のような肩で吹き飛ばされて一週間に一回は青いアザが浮かんでくる。

物語なんかにもあるが、現実のラグビー部もヤな奴ばかりだ。

だから、僕は母親に言ったんだ。

今までしたこともないような真面目な顔でね。

「殺したい奴がいるんだけど」

サイッコウにカツコイいだろ？

人生でも三本の指に入ると思ったね。

だが、そんな僕の決意も虚しく、母親は困ったような顔をして、こう叱るんだ。

「そんなこと言っちゃダメでしょ？」

ってな。

こうなったら、僕自身が動くしかないだろ？

ネットとかで必死になって探したね。そりゃあもう、血眼とも言えるほど。

青くなったアザを冷やしながら、それでもマウスを握ったさ。

そして、とうとう見つけたんだ。

「殺し屋、雇います？」

面白い見出しだな、と僕はすぐさまカーソルを合わせた。
途端に大音量の軍歌が流れだしてね、イスから転げ落ちたさ。
扉の向こうから父親の怒鳴り声をするし、とりあえず音量をゼロ
にして、画面を見つめた。

シンプルだった。いや、それはもうシンプル。

名前と年齢、それだけを記入してください。

それだけが真っ白な画面に書かれているんだ。

あの軍歌はなんなんだ、と怒りが湧き上がってくるのも無視して、
とにかく文字を打てる場所を探した。

啞然としたね、びっくりしたね。

その書き込むところを画面の隅から隅まで探しても見つからない
んだ。

ならどこなんだ？

「名前と年齢、それだけを記入してください。1」

は？

いや、まさかそこに書き込むのか、と大笑い。

また父親の怒鳴り声があるが、そんなの腹を抱えるほど笑う僕の
耳には届きはしなかったさ。

灯台下暗しという日本語を、ようやくここで理解した。そりゃ気
づかないわけだ。

「ジョブス・マンソン。15歳」

律儀に句読点なんか付けちゃってるんだぜ、僕。

まあ見ての通り、僕は15歳だ。

中学生？ 違う違う。あんな幼稚な奴らと一緒にしないでくれ。

これでも偏差値は70の高校に通っているんだ。いわゆる、エリートって奴さ。

それでもバカで幼稚な糞野郎は必ずいる。

「おっ」

いつから出ていたのか分からないエンターボタンをクリックした。すぐに画面は移り変わり、僕の住む地域の地図が表示された。なんで知ってるんだ？ もちろん僕も疑問に思ったさ。

いや、こんな治安の悪い世の中なんだし、殺し屋とかいう組織なんだから当たり前なのかも知れない。

そう考えたのは事後だ。

今の僕は、何も考えていない豚のような思考回路でその地図通りの場所に足を運んだんだ。

さあ着いた。

どこか教えてほしいか？

公園さ。公衆トイレとかいう絶好のレ スポットで有名な、いわば穴場さ。ふふ、上手いだろ？ 穴場ってさ。

僕をいじめているバカな奴らも、ここでレ プしていた体験を自慢げに話していた。

「来たはいいが」

誰もいない。

墓地のようにシーンとした公園は、僕みたいな不幸な人間を手招きしているようにも感じたが気のせいだったよ。人いたし。

「君がジヨブス君か」

スキンヘッドが似合う、掘りの深い顔のおじさんが歩み寄ってきた。

ここで、危険を察した僕の思考回路は豚からスーパーコンピューターへと変貌した。

ここは絶好のレプスポットであり、最高のハッテン場だ。簡単に言えば、ホモが集まるところだ。

なら、このおじさんはなんだ？

もしかしたら本当に殺し屋かも知れないし、僕の尻穴を掘ろうとしているホモ野郎かもしれない。

さて、スーパーコンピューター並みの頭脳を無駄に使ったところで、おじさんと握手をした。

そのゴツい手はとても冷たい。ずっと僕を待っていたのが肌で感じられた。

「殺し屋になりたいんだってね？」

おじさんは、その掘りの深い顔に似合わず、愛嬌のある笑顔を向けた。

黙って頷く。

心の中じゃあすでに殺し屋の気分さ。目をキリッと細めて、いかにもな雰囲気を漂わせる。

僕は高校生のひよろひよろなガキに全く似合わない表情をして、おじさんにだけ聞こえるよう、小声で言った。

「あんた、本当に殺し屋か？ 殺気を感じないぜ？」

正直、これをいじめっ子連中に見られたら、自殺ものだろう。

そんな僕のくだらない茶番に、おじさんはウィンクをした。

「殺気なんか出してちゃあプロ失格だからね」

その科白と同時に、おじさんは僕の背後へと周り、僕の細っこい喉にナイフの切っ先を当てていた。

さっきまで手ぶらだったはずなのに、まるでマジシャンみたいだと緊張感もない感想を抱いた。

そんな命に関わる状況でも、僕は強く言ったね。

「プロ、か。無防備のガキに刃を当てた時点で、あんたはプロ失格だよ」

「ふっ。それもそうか」

途端に背筋から悪寒と、冷や汗がぶわっと吹き出した。

それはもう死に直面したと言っても過言じゃないね。

それは、紛れもなく殺気だったからさ。

「あ、わ……あ……」

僕は無様にへたり込んで、恐怖のあまり失禁していた。

買ってもらったばかりのジーンズが濡れていくのを、涙の出そうな顔で見つめるぐらいしか出来なかったね。

おじさんはまたいつの間にか僕の前に立っていて、手を差し伸べてくれた。

「立てるか、ジョブス君」

黙って頷くしかなかった。

そこにはもう殺気なんか微塵も無かったのに、それでも僕は恐怖

していた。

その殺気は、いじめっ子にいじめられることなんかより、もっと恐かったからさ。上辺だけ強がっていた程度の僕の精神なんか、おじさんの殺気の前じゃあトランプで作ったタワーのように脆い。そして、一押しすれば簡単に崩れてしまう。

連れられるままに連れられ、男子便所へと入っていく。

そのまま個室へと誘導され、扉を閉められた。

途端に身震いがした。

今度は殺気じゃない。

この状況じゃあ、どうぞ掘ってくださいと言ってるようなもんだ。だけど、僕の尻穴は処女のままだった。

便所の、何も無い壁が、奥にパタリと倒れたんだ。そして、そこには地下へと続く階段が伸びていた。

「この先だよ」

促され、ビクビクと震える。

濡れた股間がすごく寒いが、それでも我慢したさ。あのバカ共を殺せるなら、ってね。

イカしてるだろ？

行き止まりにあつた扉に入ると、また失禁をしそうになった。

なぜか？ それはさっきと全く同じ理由さ。

そこには、殺気が渦巻いていたんだ。

何人もの人間が殺気を放っている。個人個人は微々たる物だろうけど、それがいくつにも重なり、合わさっていた。

怯える僕に、その人間たちの視線が集まった。

「おいおい、ガキかよ」

「震えてやがるぜ」

「股間濡れてっけど、まさかしょんべん漏らしちまってんのか？」

爆笑が起こった。

それに腹が立ち、僕は叫んだのさ。勇敢にもね。無謀？ 殺すぞ。

「笑っんじゃねえ！！」

一瞬で静まり返るが、また爆笑が沸き起こる。

その時の僕は身の程を知った方が良かった。専門学校に三年通わせて、みっちり叩き込むべきだったね。

浴びせられる罵詈雑言の笑い声。

「行こうか」

ライオンの群れに挑む小鹿を哀れに思ったのか知らないが、おじさんが優しく背中を押してくれた。

ここからが本当の地獄だった。

たかがいじめっ子なんていう頭のおかしい連中のためには、あまりにも過酷だった。

殺し屋になるなんて、とっても簡単だ（後書き）

「殺し屋ってというのは、こんな現実離れた奴らばかりなのかい？」

「いや、殺気だけで失禁させられるような奴、まずいねえよ」

「そりゃそつだ」

それは相手を殺そうと思うだけでいい

おじさんは僕に新しいズボンをくれた。

ダメージジーンズと言えば響きは良いだろうが、どう見ても使い古された小汚いズボンだった。それでもお漏らしのままというのは恥ずかしいだろ？ 即座に僕は着替えた。

「君はなぜ、殺し屋になりたいんだい？」

僕がジーンズの裾に足を延ばしていると、おじさんが聞いてきた。残念なことにプライドだけは一流の僕は、口をもごもごことさせてなかなか答ええない。

しびれを切らしたおじさんは、ニヤリと笑顔を浮かべて、

「いじめられてるんだろ？」

と、的当たりなことを言ってきた。

それは真実なだけに、なにより驚いた。

僕は失態は必ず取り返すし、万一起り返せない場合は完璧に隠蔽する人間なのさ。もちろん、いじめのことは、他生徒にすら知られていない、はずだ。

間抜けな面のまま固まった僕に、おじさんは変わらぬ調子で続ける。

「君のことはいろいろ知っている。高校卒業後はハーバードに進学を希望。他にくだらない情報と言え、父親は極度のヘビースモーカーで、母親はカルト宗教に入っている」

全て当たりだった。

ただただ繰り返される僕の秘密に、当の僕は口をあんぐりと開けるだけだった。

なぜこんなにも知っているのか、そんなの興味があったに決まっているだろう？

「お漏らしが治ったのが六歳の時。初恋が十一歳のー」

「なんで……知ってるんだよ……？」

「んん？」

待つてましたと言わんばかりの満面の笑顔に、僕は顔をしかめた。やっぱり、笑顔は美人なお姉さんがイイネ。

「我々は秘密結社だからね。そりゃあ、標的の情報くらいは調べてある」

「ひょう……てき……？」

「そう、標的」

標的なんて言葉を殺し屋から聞けば、まず何を考えるだろうね。僕は、真っ先にこう考えた。

「僕は、殺し屋に狙われていたのか？」

「ふふ、正解だよ」

目を丸くして、あうあうと声にならない声をあげるしか出来なかった。

だって殺し屋だぜ？ しかもプロの。そんな奴らに命を狙われていたんだ。

「じ、じゃあ、どうして僕は生きているんだ!？」

「ん？ その依頼主が死んだからさ」

「へ？」

「あら、違ったかな？ あの仕事の依頼主は君かと思ったんだが」

「なんのことだよ！！」

「ハリー君を知ってるかな？」

「あ、ああ」

もちろん知っている。

隣人で、殺しをした気違い野郎だ。

「彼が、君を殺せと言った依頼主を殺したんだ」

「なんだって！？」

ここに来てから驚くことばかりだね。

ただの人殺し野郎かと思った奴が実は僕の命の恩人だったなんて、そんなSF映画みたいなことがそうそう起きていいわけがないだろ。そういえば、ハリーはアイツを殺す前日に変なことを言っていたのを覚えている。

“命拾いしたね”

あれはそういう意味だったのか。

「にしても」

おかしいだろ？

「なんで僕が殺されなくちゃいけないんだ？」

それだけが疑問だった。

一端の高校生に過ぎない僕に、殺し屋を雇うほど殺意を持つこと

なんかあるのか？

ありえない。僕は他人に嫌悪感を与えないように精一杯生きてきたからさ。

困り果てた僕に、おじさんは言った。

「君には、特殊な能力があるからさ」

「僕に？ 特殊能力？」

おいおい、本当にSF映画みたいになってきたぞ。

「ああ、君はマラソンをしている時に、周りがものすごくスローモーションで見たことはないかい？」

「あ、あるけど」

確かにあった。

クラクラするくらい疲れていた時に、まるで世界の時間が止まったような感覚に見まわれたことがある。

その時は疲れすぎたせい of 幻覚だろう、と楽観的に考えていた。

「それが君の特殊能力。それを自在に扱えば、弾丸すらも止まってみえるようになる」

そんな馬鹿な話があるか。

「バカにしているのか？」

「してないよ。ただ、君には殺し屋の才能がある」

「すごい極端な才能だな」

「ふふ。まあそう言わずに」

おじさんは薄ら笑うと、すぐに神妙な顔に切り替わった。

「あれはね、心拍数が400を超えた時に使うことが出来るんだ」
「そんなに行くもんなのか？」

「ああ。あまりに心臓が早く動きすぎて、脳もそれにならう。それで頭の回転が早くなりすぎて周りが遅く見えるようになるんだ」

「そんなこと、どうやって知るんだ？」

「だから、秘密結社だからね」

またおじさんは笑顔に戻った。

そういつことなら、試してみたい。

「さっそく練習させてくれないか」

「うん、いいけど。まずはその遅くなった世界に対応できるほどの忍耐力を鍛えないとね」

ジーンズのベルトやチャックを整え、二人は訓練所へと向かった。

「ぎへへ。コイツが例のガキか」

殺風景な訓練所に、小太りの男が一人だけ立っていた。

その男は長いが荒れた髭を生やしていて、ワイルドを履き違えたような格好だった。

「そつだよ。この子が、例のワールドストッパーの」

ワールドストッパー
世界を止める？

なんともカッコイい名前が出てきたな。そういう二つ名にはとても憧れる年代だけに、僕の心はとても高鳴っていた。

「んじゃ、後は任せたよ」

そう言って、おじさんは部屋の入り口に座った。目の前の男と、初めて対峙する。やっぱりコイツも微々たる殺気を放っていて、僕は縮み上がりそうなのを必死にこらえた。

「坊主、名前は？」

男のガラガラ蛇の声に、素っ気なく答える。

「……ジョブス。ジョブス・マンソンだ」

「ぎへへ。いい名前だ。俺のことは不気味な男ブギーマンって呼んでくれや」

なんてイメージ通りの名前だろう。

ブギーマン。まさにその通りだ。不気味で、陰湿で、ネチツこそうな容姿をしている。

ぎへへ、と笑って開かれた口の中は、歯がボロボロだった。

「さあ、始めようか。ぎへへ、訓練を」

「具体的に何をやるんだ？」

「大丈夫さ。ぎへへ、お前は一方的に俺に殴られ続ければいい」
「は？」

言葉を言い返す前に、ブギーマンの拳が僕の鳩尾みぞおちに入っていた。全く鍛えていない僕は、腹を押さえて転げ回る。

なにせ大人の拳だ。それを鳩尾だぜ？ 立つのも億劫になる。

「早く立てよ、坊主！」

ブギーマンは僕の髪を掴み、持ち上げる。
ぶちぶち、といくつか髪の毛が千切れ、痛みで絶叫した。

「ぎいあぐがああああああぎいいいいいいい!!」
「いいね。ぎへへ、その声が聞きたかったんだ」

涙を流しながら、おじさんに助けると目でサインを送る。
だけど、

「頑張れ、ジヨブス君」

と笑顔で言われるだけだった。

髪を掴まれたまま、顔を殴られ続ける。

何度も、何度も、何度も。

血を吐いて、歯が取れて、それでも殴られ続けた。

「ぎへへ、まあこんなもんだろ」

何時間経ったんだろうか。

僕は意識を朦朧としながら、地に倒れていた。口からは血が流れるし、もう痛みどころか感覚も無い。

ブギーマンは体中に脂汗をかいて、ぜえぜえと肩で息をしていた。

「お疲れ様」

おじさんはブギーマンにタオルを渡した。ブギーマンはそれを受け取り、拭きまくった。

次に、地べたでボロ雑巾になっている僕を、おじさんは抱き起こした。

「大丈夫かい？」

「は、……………い……………」

空気が漏れたような、微かな声しか発せられなかった。

意識が途切れかけた僕に、ブギーマンが歩み寄ってきた。

ぎへへ、とあの不気味に笑いながら、

「根性が無えなあ」

僕を馬鹿にしたのだった。

去っていくブギーマンの背中に文句の一言でも言おうとしたが、

口がまともに動かせない。

「これじゃあ、銃器の訓練は無理かな」

「や、やいます……………」

おじさんの肩を借りて立ち上がる。

「まだ、出来ます……………」

「そうかい」

入り口へと、ふらふらしながらも歩く。

その間はおじさんは手伝ってくれなかったが、それでも良かった。

そんなの、僕のプライドが許さない。

それは相手を殺そうと思っただけでいい(後書き)

「プライドだけは一人前だな」

「絶対に折れないプライドが無かったらここで終了だからな」

「そりゃそつだ」

あとは行動に移すかどうかだ

――射的場。

そう呼ぶのが何よりもしっくりと来る場所だった。

木で出来た台があり、その上に黒光りする物体が置いてある。その物体の正体は、考えるよりも先に察した。

拳銃だ。

この形状はどこかで見たことがある。

手に取り、手の中でクルクルと回す。

「おっ、やはり興味があるかい？」

「ああ、にしてもこりゃあ」

カチツ、と引き金を引いた。弾は入っていないのか、ハンマーを弾くような音しか鳴らない。

だが、それでも僕の手の中に振動が伝わってきた。

指で、その拳銃の丸い銃口を撫でまわす。

「ベレッタM92。使用弾薬9mm。装填数は15の92シリーズか。やはり自動拳銃オートマチック」

すらすらと、本を読み上げるように話すと、おじさんが

「物知りだねえ」

と褒めてくれた。

小さな頃から拳銃に興味があり、それでバイオハザードなんかも出てくる武器は一通り覚えてしまっている。このベレッタM92もその一つだ。

新品のように光る拳銃を台に置いた。

「で、的はどこなんだ？ 見当たらないが」

僕が言った通り、この部屋には的が無い。発砲台はあれど、的はどこを見渡しても無いのだ。

しかし、それよりも目を引く物があった。

「血……？」

乾ききってよく分からないが、茶色い染みが壁や床に、まるで液体が飛び散るように付着していた。経験測でしかないが、あれは長く放置された乾いた血のようにしか見えない。

それに気づくと、この部屋を漂う臭いにも意識が向く。生臭い臭いだ。

一気に気分が悪くなり、膝をついた。かろうじて台に手を置いて、また立ち上がる。

手で鼻を覆うが、異臭は鼻について離れない。

まさかとは思つが、

「……！？」

カーテンが閉まるような、ガラッ、という音と共に、何かが天井から落ちてきた。それは紐で繋がれていて、着地する前にブラブラと宙に揺れる。

吐き気を催すのは、それからすぐだった。

僕はその落ちてきた物に目をそむける。

だって、あれは。

「ま、まさか……」

「そう。本物の、人の死体だ」

もう一度、そのぶら下がった死体に目を向ける。

どれにも、何かが貫通した跡があった。首を吊られているせいで目玉と舌が飛び出している。いくつかは目玉が取れて無くなっていた。

頭が吹き飛ばされている物もあった。脳みそのようにも見えるが、どちらかというところと真つ二つにしたカブトムシの幼虫から液体が流れているようなのを連想させる。

おじさんは僕の横を通り過ぎて、さっきのベレッタM92を手にし、ポケットから取り出したマガジンを装填すると、

「こつという風にするんだよ」

とニコツと笑い、ためらいなく引き金を、死体に向けて引いた。バアン、というありきたりな銃声の次に、ベチャツ、という蒸れたトマトが潰れたような不快な音がした。

ここの奴ら、みんなイカれてやがる……！！

「さ、ジョブス君」

手本を見せたおじさんは、そつと僕に拳銃を差し出した。

受け取る手が震えた。

手に取った拳銃は、最初に手にした時のように弾倉は空っぽではない。もちろんだが、安全装置なんかハナから外してある。

たった一発で人ひとりの命をどうにか出来る代物を手にしてしまった。

その恐怖は、この前の訓練でブギーマンに殴られた時や、おじさんの殺気に襲われた時とは違った。

身の丈を超えた物を手にしてしまった時の、どうすればいいのか

分からないという恐怖だった。

「さあ」

おじさんが、手を死体に向けて伸ばす。

「撃つことで、その強大な物を克服するんだ」

今の僕を背中から脅かしたなら、きっと僕は腰が砕けて座り込んでしまっただろう。それほどまでに限界が近かった。

でも、それでも僕のプライドは折れない。続ける、続けろと命令してきて、拳銃を握らされる。

本当は人殺しなんかやりたくないんじゃないか？ 僕は。

そんな心の中の葛藤は、いつだってプライドが勝ってしまうのさ。

「わああああアアアツ！！」

目を瞑り、当てずっぽうに引き金を引いた。

ガキーン、という固い物が固い物を弾く音を聞いて、僕は尻餅をついて倒れた。拳銃の威力に押されたのではなく、撃てたことで気が抜けたせいだろうね。

顔を上げて死体たちを確認しても、当たったかどうか分からないほど損壊している。

「今のって……」

「ああ、うん。外したけど、これで吹っ切れたんじゃない？」

また笑顔を浮かべるおじさんは、部屋の隅っこを指差した。そこに先ほど撃った弾丸が転がっていた。

言われた通り、確かに僕の心は吹っ切れていた。撃つことへの罪

悪感撃つことの快感に変わっていた。普通に生きていたんじゃあ、まず味わえないだろう。

「もう一発、行く？」

そのおじさんの科白に、僕は黙って頷いた。

「ん、じゃあ、次は死体を狙ってみようか」

言われて、僕は死体に銃口を向けた。

死体は幾度となく撃たれてきたんだろう。肉は腐り、銃創などなく、今まで当たった弾は全て死体を撃ち抜いていた。

多分、僕の撃つ弾は、またあの死体に風穴を増やすはずだ。

だけど、撃とうと引き金を引くと、頭の中に妙な声流れこんでくる。

男か女か。いや、老若男女すらも分からない声。それが、性別も年齢も知れないほどグシャグシャになっている死体から聞こえたような気がした。

“撃つな”、と。

駄目だ。指が震えて、狙いが定まらない。カチカチと、指が拳銃を叩くだけで、そこから先に進めない。

またさっきの恐怖が湧き上がってきた。

「ジョブス君。そういう時は、思い切りが大切なんだ」

おじさんのゴツイ指が僕の指に重ねられた。

そして、グイッと力強く引き金は引かれた。

グシャッ、という、おじさんが撃ったときのような不快な音が聞

こえた。

「ひいつ……」

血が飛び散る様を見て、特になんとも思わなかった。むしろ、ゲームみたいだと現実味を感じていない。

撃つことの快樂もまた訪れた。

「はは、は……」

ポロツと拳銃を、手を滑らせて落としてしまった。ガチャ、と重い音がするだけでそれ以上のことは起こらなかった。

これを何度繰り返されるんだろう。きつと、慣れるまでやらされるんだろうな。

死を体全体に染み渡らせた僕は、もう死体を撃つことに躊躇はしなかった。

もう一度拳銃を手にとって、引き金を引く。いとも容易く。

また不快な音が聞こえた。肩に当たったらしく、腐った腕がぼとりと床に落ちた。そこから黒ずんだ血が、粘液のような粘りっこさで溢れ出す。その黒ずんだ血から、虫らしい生き物が何匹か飛び出した。

「ま、死体を撃つぐらいは簡単にクリアしてくれたね」

僕は気が狂ったように、黙って撃ち続ける。

そこで肩を叩かれた。

「そろそろ帰る時間じゃないか？」

「えっ？」

我に帰った僕は、おじさんの着けていた腕時計で時間を確認した。六時……。確かに僕の外出時間の限界だ。拳銃を台に置く。

「どうだった？」

公園まで戻ってくると、おじさんに感想を聞かれた。どうだった、と問われても、なんとも言えない。ただ、

「本当に、僕は殺し屋になれるのか？」

それだけが聞きたかった。

ふざけたような真面目な回答に、おじさんは苦笑して、

「そうかい」

と笑顔を浮かべるのだった。

そして手を振っておじさんとは別れた。

家に帰ると、僕の顔とナリを見て、両親から「いじめられたの？」

とか「事故でも起こしたのか？」と詰め寄られた。

それを振り切って、僕は自室へと逃げ込む。

これは僕だけの秘密なのだ。誰にも話さない。

正直に言つと、めちゃくちゃ辛かった。

でも、ここで終わるなんて、僕のプライドは許してくれそうもない。

ブギーマンの一言が、それだけが一流のプライドを傷つけたから

だ。

“根性が無えなあ”

ぎりっ、と歯をこすらせた。

怒りがふつつと込み上げて、冷静さが一度消えた。

あいつをギャフンと言わせるまでは絶対に諦めるもんか。

ジョブス・マンソンは、この時生まれて初めて、本物の敵対心を抱いた。

あとは行動に移すかどうかだ（後書き）

「別に死体を撃つぐらい、どつってこともなくね？」

「体がボロボロで、助けを求めている女の人に銃口を向ける時、お前はどつという気持ちになる？」

「興奮するね」

「……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1967z/>

殺し屋ジョブスはいじめられっ子 ~ Revenge killer . J obs ~

2011年12月8日22時21分発行